
笑顔の君

高田高

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

笑顔の君

【コード】

N1736E

【作者名】

高田高

【あらすじ】

秀と奈緒の二人はとても仲良し。しかしこの二人、実は……。

オレンジ色が校舎を照らす午後四時頃、二階の一室にあるそこに、二人の生徒が居残り、なにやら作業をしていた。

そこは美術室。少年は雑に置かれた画板から一つを取り、適当に置かれた椅子に座り、イーゼルと呼ばれる木製の三脚台に画板を掛け、そこにスケッチブックを置き、真っ白なページを開く。

少年と向き合うように、少女は置かれた椅子に座り、なにやらポーズを決める。

「動くな」

「はあーい……」

少年に言われるまま、少女は背筋を伸ばして静止。しかし五分どころか三分ともたず、足をばたばたさせはじめた。

「動くなって」

「黙って座ってるのキツイの！　なんかしゃべろうよ！」

「わかった。黙ってしゃべってる」

「いやいや、無理だから」

などと話しはじめて二十分程だろうか、真っ白だったスケッチブックには、簡単にはあるが少女の姿が描かれている。

髪には色を入れていないため白髪だが、毛先は細かく丁寧に描か

れてある。

少し細い気の強そうな上がり目、鼻はあまり高くなく標準的、口は少し口角が上がり笑みを浮かべている。

それを見ながら少年は小さく唸り、腕組み、足組み、首を傾げた。少女もつられて首を傾げる。

「どした、画伯」

「……素材が悪い」

「コラー！」

少女は駆け寄ると、少年を押し退けて、スケッチブックに目をやる。

こぼれたのは感嘆の溜め息。

「凄いよ、秀。やっぱりモデルが良いんだよ！」

少年 秀は頭を掻くと、少女の画に加筆していく。走らせる指先は軽やかで、思わず見取れてしまう。

「うーん。どうだ？」

秀に言われ、少女は画を覗くと、眉を吊り上げ肩を震わせた。

「これ、誰だよ！ あたしの面影ないじゃんよ！」

艶のある長い黒髪、おっとり感漂う下がり目、小さな口は少しだけ笑みを浮かべている。大和撫子をまさに画に描いたようだ。

「俺の理想」

「あー、そう！　ったく、もう帰るから！」

「奈緒、ちよつと待、」

少女　奈緒なおは、秀の声を無視して美術室をさっさと出て行った。一人残った秀は、スケッチブックを閉じると窓の外に目を向ける。黄昏色とでも言うのか、沈みはじめた太陽に向けて溜め息一つ。立ち上がると、床に置かれた鞆を提げ、美術室を出た。

「ちよつとぶざけすぎたか……」

ぶつぶつぶやきながら、先に行ってしまった奈緒を追い掛けた。

昇降口で上履きから靴に履き変えている奈緒を見付け、秀は駆け寄った。

「奈緒、待てっで。道同じなんだから一緒に帰ろう」

「……ん」

と奈緒は持っていた鞆を秀に突き出す。

それを受け取ると、秀も早々と靴に履き換え、先に行ってしまった奈緒を追い掛けた。

「奈緒、何怒ってんだ？」

奈緒は隣を歩く秀に、鋭い視線を送る。

「どうせ、あたしは吊り目だし、鼻は低いし、おっとりしてないですよおー」

「いや、あれは理想なだけであって、好みとは少し違う」

「秀画伯の好む女性とはどんな方なのか、ご教授願えますか？」

奈緒はにんまり笑顔を秀に向け、それが気恥ずかしいのか、秀は頬をぽりぽり掻きながら顔を反らし、遠くに見える運動部連中に向けて向ける。

「ほらー、言いなさいよお。秀の好きな人は誰なんですかあ？」

「あの、あれだよ、な…… な、直太郎森山」

「そんな奇怪な名前の人いないし、そもそも男だよ。秀が好きなのは奈緒ちゃんでしょ？ 奈緒ちゃんが好きなんでしょ？」

奈緒のにやけ面に多少イラつきながら、秀は溜め息をつくど、頭を掻きながら低いトーンでぼそりと一言。

「奈緒ちゃんが大好きです。………満足か」

「声が小さい！ けど、まあいいでしょ」

二人は顔を見合わせて笑い合つと、帰宅路を歩きはじめた。

「たっだいまー！」

「はいはい。おかえり。奈緒はいつも元気ねえ。その元気を少し秀に分けてあげてよ」

リビングから顔を出した母親は、くすくす笑いながら二人に近付くと、少し疲れた表情の秀に目を向ける。

秀は二人分の鞆を持たされて地味に応えらしく、肩を上下させている。

「いや、いらぬから」

秀は二人分の鞆を玄関先に置くと、どっかり座り込み、ふーっと息を吐いてうなだれた。

「そんなに疲れたの？ ハグしてあげよっか？」

「奈緒。一応兄弟なんだから、人前で変な事しちゃダメよ？ 秀も、奈緒に何かされそうになっても、自制しなさいよ」

母親は本気で止める気がないのか、やんわりした態度でそう言々と、夕食の支度にキッチンへ向かった。そう。二人は兄弟。ただし、血は繋がっていない。秀の父親と奈緒の母親が二年前に再婚し、兄弟として暮らすようになったわけだが、実は二人はそれ以前から付き合っていた。

そのため、まさか自分の恋人と兄弟関係になってしまうとは、思ってもいなかった。

更に言うと、母親は二人の関係を知っている。

よくある話。父親だけが知らない蚊帳の外というやつだ。

二人は各々部屋に戻ると、夕食までの間は別々に時間を潰す。わけがない。

「秀！ 遊ぼうよ！」

と言って来るのは決まって奈緒。それに溜め息をつくのは決まって秀だ。

「遊んでやるから、黙って座ってる！」

「はいはい、っと！」

奈緒はベッドにダイブすると、猫のように背を丸め、目を閉じた。枕から香る秀の匂いに、奈緒の頬が自然と緩む。

「奈緒、寝るなよ」

「……ん」

危うく寝そうになっていた奈緒は、体を起こすと、背筋を伸ばしながら欠伸をし、眠い目をくしくし擦った。

「ねえ、秀。最近彼氏っぽい事してくれないよね」

「コンクール近いから、そっちに力入れたいし、それに家だと邪魔者が多いしな」

笑顔の君

秀は勉強机の椅子を引くと、腰を下ろし、スケッチブックより一回り小さい、クロッキー帳と呼ばれるノートを机の棚から取り上げ、

身近なものを描きはじめた。奈緒なわけだが。

「また、あたし？」

「笑って」

秀に言われ、奈緒はぎこちなく微笑む。

「笑顔が黒いぞ。お前は悪代官か」

「越後屋、おぬしも悪よのう。とか？」

「あー、そんな感じ」

くすくす笑う奈緒の顔を見ながら、手に持った鉛筆を急がせる。相変わらずの速さであったという間に、白紙だったページに奈緒の笑顔を描いた。

「どんな感じですか、画伯」

「ほれ」

渡されたそれには、奈緒の笑顔が描かれてある。

先程よりも雑ではあるが、気の強そうな上がり目、少女らしい柔らかな口元、雑とは言え、それはあくまで先程に比べての事で、素人が丁寧に描いたものとは比べようもない。

「秀、やっぱり上手だね」

奈緒が顔を上げると、秀と目が合った。

秀は立ち上がり、奈緒の隣に腰を下ろすと、しばし見つめ合う。

「奈緒、目……」

「う、うん……」

奈緒が目を閉じたのを確認すると、肩に手を置き、ゆっくりと顔を、唇を近付ける。

「ねえ、二人とも。お父さん、遅くな……」

母親の乱入により、秀は後僅かで奈緒の唇に触れるという体勢のまま、動きを止めていた。

「ちよっ！ あ、あんた達、そういう事は夜しないさいよ！」

「ノックくらいしろ！」

奈緒は溜め息をついて立ち上がると、母親を押し出し、部屋の戸を閉めて鍵を掛けた。

「秀、続き」

「改めてだと、さすがに恥ずかしいんだけど」

「このままだと、なんかモヤモヤしちゃうの！」

秀は頭を掻きながら立ち上がり、奈緒に近付くと、肩に手を置き体を引き寄せ、その勢いのまま唇を重ねた。

それは短い時間だったが、二人は時間が止まっている程に長く感じ

ていた。

唇を離れた後も、しばらく見つめ合い、自然と口元が緩む。

「キス、しちゃったね」

「兄弟なのにな」

「血は繋がってないよ」

「そうだな」

笑い合い、見つめ合い、再び唇を重ねる。

「これってマズイかな？」

「血は繋がってないんだから、別にいいだろ」

「そうだね」

キャンパスに描かれた少女の微笑み。

明るく柔らかかな印象のそれは、見た者全てを笑顔にさせてしまう。

コンクール審査員特別賞

『笑顔の君』

笑顔の君

終

(後書き)

タイトルは、思い付かず(仮)みたいなものです。やはり、恋愛ジャンルは難しい。これ、恋愛になってますか？

ちなみに作者は絵画知識ゼロ、絵の描き方など中学止まりです。描き方とかにツッコまれると大変です。対処出来ません。ので、評価はマイルドで。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1736e/>

笑顔の君

2009年3月24日09時25分発行